

〔書評〕

柴谷篤弘

『われらが内なる隠蔽』

径書房，1997年，全315頁

——「暴露」という戦略の考察——

城 達 也

(1) 戦争画と「隠蔽」

「隠蔽」が収まらない。いまマスコミに出ているのは氷山の一角だ。本書のタイトルに惹かれて読み始めた。筆者は生物学や科学史を専門にして、オーストラリアで核兵器反対の科学者グループ、日本ではPKO反対運動などに加わった政治好きの学者である。1920年生まれであるから、学生運動世代よりも以前の年齢層である。民主主義科学者協会に参加していたというから、だいたいその政治的立場は分かる。1992年から数年間、京都精華大学の学長をしている。なんとも京都精華大学の特徴が出た学長人選ではある。

本書は私たちの現状認識、状況判断が間違っただけになってしまう「隠蔽」の性質を明らかにすることが目的だ。そのような政治的立場の学者による、「隠蔽」をテーマにした随筆に近い研究書である。左翼活動家らしく戦争責任の問題に関心があるようだ。当然に「隠蔽」の事例紹介は、かなり偏った選定となっている。取り上げられているのは戦間期の戦争画の隠蔽から始まり、戦争詩歌の隠蔽、シベリア出兵など戦争の失敗や戦争犯罪の隠蔽、著名哲学者の論文の出版社による隠蔽、政治的権力闘争での粛清の事実の隠蔽、重大事故の隠蔽、ユダヤ人虐殺の過去の隠蔽などである。なかでもシベリア出兵はその無意義さと失敗という「汚点」や、あるいは出兵先での日本の加害行動を「隠蔽」して忘れ去ろうとしていると筆者は指摘している。

本書第一章でなされている戦間期の戦争画の洗い出しはなかなか面白い。「芸術家の政治権力への加担」というテーマはドイツでもよくあるが、日本の画壇の戦争賛美・協力を明らかにしている。戦争を描いた美術作品についての分析においては、戦後になっても日本において戦中の美術作品の展覧会がなされず、まさにわれわれ日本人にとって都合が悪い絵画作品を「隠蔽」してしまうことが指摘される。戦前にたくさん、戦意高揚の美術展が開かれていることを取り上げて、筆者はそれに対して、戦中などの絵画を持ち出してきた検証している。藤田嗣治などの有名な画家が、美術表現として戦争画を描いたのであるという弁明をただけで、戦後日本の美術家と戦争との関係の議論は終わったと指摘している。美術論ではなく、当時の日本でその絵画が戦争に利用されたという事実、また画家

も宣伝に利用されたという事実、それを隠すなという議論である。

ちょうどドイツでもあったように、日本でも絵画は戦意高揚に利用された。ドイツでもヒトラーを賛美する、あるいはゲルマン思想を賛美する絵画や彫刻、建築が多くある。それについては芸樹論というよりも、そのような絵画や建築が戦争に利用されたという社会学的議論が重要である。美的表現としての活動をしただけであり、それが戦争あるいは政治権力に利用されたとは知らなかったという弁明は、かつてユダヤ人大虐殺に関わったアイヒマンの弁明と似ている。彼は、「自分は命令に従って職務を全うしただけだ」と裁判で主張した。自らの視野をわざと限定的に主張することによって、戦争という政治的行為と自らの目的・意図とをまったく別物であると述べる。これも一種の「隠蔽」である。

続けて第二章で筆者は、岩波書店から戦後に出された『斎藤茂吉全集』には、太平洋戦争が始まってからの好戦的な短歌が除外されて、「平和的なもの」だけが集められたと指摘している。戦争短歌はすべて全集の末尾に「補遺」としてまとめられていた。さらには好戦的な詩もいくつか挙げている。

また、岩波書店が西田幾太郎の著作を改ざんしていたことも指摘される。岩波書店や西田周辺の研究者が、「純粹哲学者」イメージの西田幾太郎への評価にとってマズイと判断した部分を改ざんしたのだと言う。この指摘は筆者オリジナルではなくほかの研究者からの引用ではあるが、改めて興味を持たせる。また戦争詩歌でも同様に指摘している。封印されることによって、事実の検討もできないのである。

大阪経済大学から出された『黒正巖著作集』のなかには、彼が戦前に国体を賛美した文章が加えられていない。現在において黒正巖に配慮しようという人たちが、「全集」でなく「著作集」とせざるを得なかったのだろう。これはなにも改ざんに該当していないと強弁されるかもしれない。しかし「平和と民主主義の使者」としての「黒正巖像」に都合が悪かったから所収しなかったと勘ぐられるだろう。これも「隠蔽」である。

(2) 心理学的観点での「隠蔽」

岡本真一は心理学的観点から「隠蔽」というものを整理している。①相手に知らせる義務がないので、口にしない、②相手に知らせる義務（社会的・道義的責任）があるのに、口にしない。③相手から実際に尋ねられているのに答えない。この3種類の隠蔽があるという。とくに①と②と、そして③のなかでも「全体の一部しか答えず重要な情報を隠す」場合は、隠蔽しようという意図も隠していることになる。③でも「回答を明確に拒否する場合」や、「話題を逸らす場合」は隠蔽している意図が明白になる。

実際に組織においては、②のように社会的・道義的責任があって知らせなければならないのに、こちらから尋ねなければ知らない顔をしている場合が多い。中にはこの社会的・道義的責任を理解していないトップもいる。さらには無理矢理に、「知らせる義務などどこにも書いてない」と、役人のように強弁して、相手を無視する者もいる。

またようやく相手から尋ねられても、わざと重要な情報を隠すとか、曖昧な回答をして、なんとか隠蔽する意図をさらに隠す、つまり「隠蔽の隠蔽」をする。「あの役職者は交代

したのですか」と尋ねられて、「いずれ連絡します」と答えた場合は、③であって、回答を明確に拒否はしていないが、いわば「先延ばし」にしているのであり、隠蔽の意図が受け手側に対してほぼ分かってしまう。

誤情報伝達と違って、「隠蔽」の場合は話し手が真なる現状をそのまま認識している。しかし見せかけとしては何も表現しない。したがって受け手に対しても何も認識させたくない。このまま受け手が何も感じなければ隠蔽は成功であるが、受け手が推測するなどすれば隠蔽は失敗である。そうすると話し手はさらに、「誰が情報を漏らしたのか！」という犯人捜しをする。あるいは「受け手こそコンプライアンス違反をしている」などと因縁をつけさえする。そうやって事態はますます混乱していくのである（岡本真一『悪意の心理学』2016, 中公新書, pp.181-4）。

このような心理学的要因を考えれば、いうまでもなく「隠蔽」は現在の組織においても、まったく同じことが起きる。特定のイデオロギー・思想・理想に従った組織体制を維持するために行動しておきながら、あとで芸術のためだったと弁明して、直接にはその古い思想に与していなかった、そのための政治的行動ではない、そんな言い訳がいつもある。さまざまな逃げ口上を用いて、みずからの関与を否定するという「隠蔽」である。

本書でも言及されている大学における隠蔽などもまさに今日的な分析対象ではある。大学広報でも、自分たちの大学のクラブが活躍したとか、研究成果が出たとかならば喜んで広報するが、逆に不祥事などの場合は木で鼻をくくったように「目下、調査中です」と回答するのみである。「いずれご連絡します」などという、返事になっていない返事も同種であり、そのようにしてはぐらかすことで事実上の「隠蔽」を諮っている。

条件が困難だった、自分も殺されるかもしれないなかった、マインドコントロールされていたなど、だから「隠蔽」したという逃げ。思想体制のために「利用された」のか、「自ら進んで賛同し行動した」のか。それは本人の意思の問題は別として、事実としては同じことである。捜査に入ることを隠した、不祥事があったことを隠蔽した。すべてそれは、思想体制、現状組織体制を維持したいがための行動である。何も自らがしなかった、する責務があるのにしなかった、しかし善意で助言したからよいのだ、という強弁も同じこと。本人の後付けの「意図」は関係ない。ハラスメントの事実を知っていた自分自身の隠蔽。絵画が利用されたように、学内政治において、表の神輿として利用して担いだものに対して、すべてその人物の責任にして、自分たちが裏で操作していた事実を隠蔽するのである。

そのような隠蔽している事実を明らかにした途端に、「守秘義務違反」とか、「業務妨害」とか、とんでもない理屈を持ち出す。まさしく「隠蔽の隠蔽」である。現在の大学においても、無意義な作業、失敗の歴史、あるいは仲間の「加害行動」がすべて「隠蔽」される。隠蔽そのものよりも、その隠蔽の事実を明らかにしようとする行為に対して「情報漏洩」だ、あるいは「業務妨害」だと非難するのである。

(3) こんにちの大学における「隠蔽」

本書でもっとも参考になるのは、現代の大学における「隠蔽」の分析である。筆者は三

年間の私立大学での学長経験から、大学経営でも「隠蔽」は不可避だと述べている。しかし「その度合いを減少させ、その裏をかいていくこともまったく不可能でないと感じる」（本書、p.234）とも述べている。

筆者は大学独自の不道德行為として、個人的な便宜をはかる口約束と引き換えになされる性的嫌がらせ（セクハラ）と、研究者・表現者の独創性にかかわる不正行為とが考えられると述べる。これを大学の名声や評判のために隠蔽する。「最初の誤りを認めずに、つじつまをあわせようとしてだけ、がんばればがんばるほど、その被害が大きくなってしまおう」（本書、pp.236-7）。

「知識産業従事者といえども、破廉恥行為の可能性としては、普通人とかわらないことを理解すべきである。そして、基本的にそれを全面的に認める方針で動いたほうが、結局は損害を最小にできる」（本書、pp.237）との筆者の指摘は当然のことではあるが、再認識すべきだろう。

「科学者も不正をおこない、過ちを犯す普通の人である、ということ、まずは認めることから出発せねばならない。このことを認めてこなかったという点で、従来の科学教育は「隠蔽」の咎めを受けねばならないようですらある。」（本書、pp.238）。とくに教育者であることは、社会的に全人格を問われるという前提があり、この咎めは職業的本質にかかわるといふ。

さらにはせめて事が終わってすべてが既成事実になった時には「その間の隠蔽について、事後的に、しかしなるべく早く、全経過を説明して、事後了解を関係学生全員に取り付ける努力をすること、またその間の経過の関係記録の原資料をすべて整理して、のちのちの他者による批判的検討を容易にしておくことを心がけること、なども必要であった。」（本書、pp.239）。

この筆者の指摘は当然のモラルであるが、それができていない教育機関のなんと多いことか。筆者は「科学の聖域」に関する「神話」にも言及する。筆者の言うように「隠蔽は人々を疎外し、敵に回すことになる」（本書、pp.241）のである。

たしかに本書を読んだ全体的な感想は、出版された当時、77歳だと思われる筆者がダラダラと随筆を書いているという印象がどうしても残る。文献は左翼にお決まりの作者が多く引用されていて、本書の出された1997年においても老兵健在なり、というところか。

しかし、現代も日本の大学に大勢在籍していて、なかには大学を牛耳って自らの権力維持のために「隠蔽」も辞さないような教授たちに、筆者のような人物が「隠蔽」批判をしていることを知ってもらうには本書はちょうどよい。戦時下の思想体制を批判しているのに、自らが大学組織にて左翼思想の政治活動を「教育」だと述べていることに気づかない。まさに内なる隠蔽は、みずから理性を体現していると威張る、こうした教授たちにある。大学組織内で権力を持つ高齢者の教授たちに対して、あなたたちの仲間である者が隠蔽を批判しているよ、という意味で本書はこんにちなお有用であろう。

(4) 巨大な組織的「隠蔽」に対する個人の「暴露」

さて、そのような「隠蔽」組織に対して、本書ではいかなる対策を提示しているか。

すでに掲載した他書物の書評で、「心理的安全性」のない「恐ろしい組織」について触れた（エイミー・C・エドモンドソン『恐れのない組織』（2019＝）2021，英治出版）。この組織では、互いにミスを見つけあいをしている。内部利害が極めて激しい組織では、「隠蔽」は日常茶飯事である。また懲罰も、政治的取引の上で、軽くなったり重くなったりする。公正なガバナンスもなにもない（本書についての私の書評は『大阪経大論集』74巻4号，2023年）。

つまりまずは「不祥事」とみなされる行為、そしてそのことを隠す「隠蔽」という行為、さらには曖昧で基準のはっきりしない「懲罰」という行為は、その組織そのものの心理的安全性を図る指標である。そして、そのような組織では、なかなか公正な手続きを広めることがうまくできない。この解決策が問題である。

高橋敏夫は松本清張の小説の方法的基盤は「隠蔽と暴露」であると分析している。清張の小説は、圧倒的な勢力による重大な秘密の形成と隠蔽に対して、個人の小さな暴露を描いている。隠蔽の力が個人のなかで働き続ける。「隠蔽する社会」という大きなものに対して、個人も日常のなかでその隠蔽に加担している。しかしある個人のなかに沸き起こる疑問がだんだんと人々に広がっていくのだと指摘する（高橋敏夫『松本清張「隠蔽と暴露」の作家』集英社新書，2018年，p.55）。

とくに戦争では、大本営発表のように体制維持のイデオロギーによって敵国だけでなく自国民に対しても情報操作する。総戦力戦は、「隠蔽の総力戦」も生み出す。不都合なあらゆる資料は燃やされ、まさに無い物とされる。高橋は、とりわけここでは吉田裕の研究を示して、大学研究機関においても、終戦の日に重要書類の焼却や機材の破壊がなされたという「大学の戦争責任」を指摘する（高橋，同書，pp.71-7）。

この本では、さらに松本清張のそれぞれの作品について分析されている。「明るく輝かしい現在が、暗く惨憺たる過去を隠そうとして、惨めたらしい事件を連鎖させる」。まさしく、「砂の器」のストーリーはそうであった。隠したい過去は個人的なものではあるが、しかし巨大な社会の構造に起因するものである。それを暴露されたときに殺人事件が起こったのである（高橋，同書，pp.99-100）。さらに殺人事件を追っていくなかで、刑事によって明らかにされるのは、この加害者がおかれた社会の秘密であった。

しかしながら、高橋のいう松本清張の方法のように、少しずつ疑いをもって、それを広めていくという方法は大事であるが、やはりもっと重要なのは、今回の書評で取り上げた柴谷のいうような証拠や証言による暴露であろう。

柴谷は、「正直な討論が繰り返され、関連した事実もむしろ広く知られるようになった……。それこそが、事実の隠蔽を望んだ諸団体が、望まなかったことなのだ。こうして隠蔽しようと努力する姿勢が「明らかに見えるもの」になれば、そうした努力に抵抗する動きも表面に出てくることで、隠蔽の努力は結局のところ、逆効果でいくらかは克服でき

るようである。」(p.244)と書いている。「立場の違った人びとのあいだで、「公平な」討論をあらゆる方面で執拗に繰り広げること」(p.244)が必要である。ここでは、組織内議論をしていくということだけでなく、隠蔽している事実を「明らかに見えるもの」にすること、つまり隠されたものを暴露することが大事である。

過去の隠蔽の暴露、すなわち「脱隠蔽」作業が大事であるとともに、現在進行中の事柄に関しても、そもそもの「隠蔽」を起こさせないことが大事だという。つまり「非隠蔽」なのだそう。そのために記録や資料保存が大事である。

政治活動に携わってきた柴谷のこの戦略はなるほど、重要である。「心理的安全性」の議論にあったような、単純な民主主義的議論の推進ではない。むしろ、隠されている、隠蔽されている、という事実を白日の下に晒すという行動が大事なのである。権力側はそうした暴露行為を「情報漏洩」あるいは「業務妨害」だと因縁をつけてくるだろう。「逆ハラメント」だなどという理解できない主張もなされるかもしれない。

だから、いまであれば、メール、Line、録音、写真、録画が大事となる。さらには証言も大事である。証言は時として当事者しか知りえず、証拠がない場合は当事者間で証言の食い違いが出てくるだろうが、それでも、証言が出されることによって、その誠実さ、真実性、道徳性のそれぞれについて、世間の判断するところに任せるしかない。

民主主義的な議論など通用しなくなった社会組織において、そして「隠蔽」が常態化した組織において、ガバナンス改善の方法はここで本書の筆者が述べてくれているように、まさに「脱隠蔽」「非隠蔽」のための「暴露」という方法かもしれない。